

はじめに

第1部について

人間は、日常生活のなかで、それぞれに目的をもちながら、実にさまざまな運動を展開しているものである。

ところが、体育として行われる運動となると、人間の運動の実態とは関係なく、きわめて画一的に、同質の平板な力性（つねに中間的力性）による、一本調子の運動に限られてしまう。

身体運動の美的表現を目的としているダンスでさえ、一定の表現様式に拘束され、特定の技術とか動き、流行によって限定されている。さらに、勝敗をかけて競い合う体操競技、新体操、フィギュア・スケート、シンクロナイズド・スウィーミングなどにおいては、高度に専門化された技術の習得に追われがちである。

このように体育運動の場において、身体運動がきわめて限定的あるいは様式化されすぎている現在、あらためて身体運動の本質をさぐり、身体運動に生命をとりもどす必要性を強く感じる。

この観点から第1部では、「運動教育」の問題を、もう一度基本的に考えなおしてみることをテーマとしている。

わが国の学校体育においては、運動教育（Movement Education）という領域は独立して認められてはおらず、各種スポーツや体操、ダンスの領域で、それぞれの種目が必要とする技術の追究過程で断片的にとりあげている程度である。しかし、総合的な人間の運動の本質をふまえた技術の追究に視点をもつことが必要である。

運動教育（Movement Education）をはじめて提唱したルドルフ・ラバン（R. Laban, 年譜参照）は、1930年代には、すでにヒューマン・ムーブメント（Human Movement）の概念を確立し、広くヨーロッパの体育教師に影響を与えた。そして、1960年代には、実践的な研究も進み、運動教育がイギリスなどで学校教育の現場に位置づけられたのである。

ラバンの思想を受けついでいるラバン・センターは、現在ロンド大学に統合されて、ゴールドスミス・カレッジ（Goldsmiths' College）に付属している。

モダン・ジムナスティックス（Modern Gymnastics）、モダン・ダンス（Modern Dance）に関心をもち、実践を通しての研究を進めていた私にとって、ラバン・センターはまさに、その原点を知るために、一度は訪れたい聖地のようなものだった。

幸運にも、1981年から82年にかけて私はそのラバン・センターに留学する機会を与えられた。

実習を通じて学んだラバン・センターにおける運動教育の実態、さらに、他の国々の運動教育の実態の視察を通じて学んだこと、感じたことなどをとりまとめ、わが国に適合する、より楽しい運動教育の内容の工夫を試みたいと思っている。

第2部について

モニク・ベルトラン (Monique Bertrand) とマチルド・デュモン (Mathilde Dumont) の著書『身体表現——運動と思考——』(Expression corporelle—Mouvement et pensée—)

私がこの本に出会ったのは、1973年夏、パリの舞踊書専門店 (De La Danse) であった。

著者モニク・ベルトランとマチルド・デュモン (芸名ピノ・エ・マト = Pinok et Matho) にはすでに1969年、東京で開催された第6回国際女子体育会議の時出会っていた。彼女たちがその際に行った講演と実技 (レクチュア・デモンストレーション) はきわめて印象深いものであった。

演題は著書名と同じ「身体表現」——運動と思考——であった。はじめの10分程の講演では、その内容が十分理解できなかったが、続いて行れた二人のデモンストレーション・プログラムのパントマイムは、その意図を十分に伝えてくれた。その時の作品は、1) 二人の女王、2) 大都会、3) ベンチにて、4) 暗闇の囚人であったが、それぞれが人間の心の底にあるさまざまな思い (ライバル意識、孤独感、ジェラシー、不安感など) を短い作品のなかで、見事に表現しつくしていたからである。

だからパリで彼女たちの名前とこの本に出会った時は、旧知にでも出会ったような気がして、すぐに買い求めたのである。しかし、フランス語で書かれているこの本の内容を読むことはかなわず、いたずらに眺めているばかりだった。

5年程たったある日、なにげなくこの本のことを、本学のフランス語担当の竹内勉也教授に話したところ、「身体表現」の内容に興味を示され、翻訳をこころよく引き受けてくれた。

この本の全文訳は、まだわが国で紹介されておらず、私自身この論文作成にあたって、共鳴した内容も多く、そのまま引用している部分もあるので、全文を掲載させていただくことにした。

広く身体運動文化に関わりをもつ指導者、研究者にも是非読んでいただきたいと思う。